

氏名	三代 真理子
ヨミガナ	ミシロ マリコ
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第256号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 クレズマー音楽の旋律構造分析

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	植村 幸生
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	塚原 康子
(副査)	東京藝術大学	准教授	(音楽学部)	毛利 嘉孝
(副査)	国立音楽大学	教授		横井 雅子

(論文内容の要旨)

本論文は、クレズマー音楽の旋律構造を、反復という視点から考察するものである。クレズマー音楽の旋律には多くの反復が見られ、それらの反復が旋律構成に深く関わっていると考えられる。本論文ではフレーズやモチーフ等、旋律を構成する様々なレベルで、反復と旋律構造の関係についての分析と考察を行う。

クレズマー音楽は17世紀頃から中東欧ユダヤ人社会の内外で儀礼や踊りの伴奏のために器楽を演奏したクレズメルのレパートリーと演奏様式を起源に持つ音楽である。クレズメルの活動は17世紀頃の中欧から始まり、ユダヤ人のディアスポラと共に移動しながら発展した。その後、20世紀後半の米国における復興を経て、現在はワールドミュージックの一分野となっている。この音楽についての音楽学的な研究は、①旋法性、②形式的な側面、③演奏実践技法を中心に進められてきたが、旋律の形式を詳細に分析した研究はない。

第1章では先行研究を整理する。ここではクレズマー音楽の音楽的側面に関する先行研究の概要と課題を示す。この分野については、これまで旋法性、形式、演奏実践技法に関して研究成果が報告されているが、本論文で扱う、旋律上の形式に関する研究は一部に留まっている。

第2章では分析方法と分析対象を述べる。本論文では、対象曲の旋律に現れる反復を分析する。まず、分析対象曲について、その音源から楽譜を作成する。次に作成した楽譜に基づき、各曲（演奏）の旋律を構成する要素を大きい順から、セクション、フレーズ、モチーフ、モチーフ要素という4つのレベルに分ける。そして、それぞれのレベル毎に反復の仕方を分析し、反復様式と旋律構造の関係について考察する。

分析対象は、クレズマー音楽の残存する最古の音源資料の中から、演奏される場面が明確である5種類の音楽の14曲（演奏）を選定した。具体的には、1) マーズル・トーヴ（Mazel Tov: 3曲）、2) フン・デル・フペ（Fun Der Khupe: 3曲、3) ミツヴァ・タンツ（Mitzve Tanz: 3曲、4) ブロイゲス・タンツ（Broyges Tanz: 3曲、5) カレ・バゼツン（Kale Bazetsn: 2曲、である。

第3章は分析結果を示す。そしてクレズマー音楽の旋律には多くの反復が含まれることを明らかにする。クレズマー音楽はセクションと呼ばれる旋律単位を、あるパターンに従って繰り返す構成を持つ。セクションはいくつかのフレーズで構成され、フレーズレベルで様々な形式の反復がみられる。フレーズはモチーフで作られるが、フレーズ内で多様なモチーフの反復が行われている。更にモチーフには、より小さい要素の反復で構成されるものがある。またこれらの反復は、しばしば変形を伴っており、これにより様々な音楽的効果を生じている。これは特にフレーズレベルの反復において顕著に見られる。この章の第1節では分析対象の各曲について、その旋律線の形状と旋法の動きと併せて、セクションレベルでの反復を分析する。第2節ではフレーズ、モチーフ、モチーフ要素という三つのレベルにおける反復を、それぞれのレベル毎に分析する。

第4章では前章の分析結果に基づき、旋律構造における反復の様式とその意味について考察を行う。まず、フレーズ、モチーフ等のレベルで、出現する反復を、その様式毎に分析する。そして反復が出現する旋律の

文脈上の位置から各反復が持つ、曲（演奏）構成上の役割や意味について考察する。またクレズマー音楽における共通の反復パターンを抽出する。

以上の考察結果に基づき、クレズマー音楽の旋律構造について、以下の7つの特徴を結論として示す。1) クレズマー音楽の旋律においては、その大部分で旋律素材の反復が見られる。2) 反復は4つの構造レベル、すなわちセクション、フレーズ、モチーフ、モチーフ要素において多数かつ多層的に存在し、そこには幾つかのパターンが存在する。3) 反復は多くの場合、音高変化、旋律の部分的な変形等の多様な変化を伴って現れる。それらの変化においても幾つかのパターンが存在する。4) 旋律素材の反復は、単に反復される旋律素材の動きを強調するだけではなく、旋律内の緊張感の高まりと解放、躍動感の創出、旋律の流れの停滞と解消等の上で、重要な役割を果たしている。5) いくつかのセクションにおいては、異なる構造レベルの反復が重なり合うことによって、その旋律の運動性や印象が生み出されている。6) いくつかの曲においては、同一曲内の異なるセクションの間で、同一の旋律素材（モチーフまたはモチーフ要素）を繰り返すことで、曲内の統一感が醸成されている。7) ジャンル（演奏の場面）毎に、反復の様式には特徴的な傾向が見られる。

以上の分析と考察を踏まえ、クレズマー音楽の旋律は多レベル、かつ多様なパターンの反復により構成されていることを明らかにした。

#### （総合審査結果の要旨）

クレズマー音楽とは、一九世紀以前の中東欧ユダヤ人コミュニティにおいて、職業的な音楽家（クレズマー）によって演奏されてきた器楽アンサンブルである。二十世紀以降、主として米国で復興され今日に至っている。従来、この音楽の分析は旋法性、形式、演奏技法などの観点からなされてきたが、本研究は、クレズマー音楽において「反復」が本質的に重要であるという視点に立ち、その反復がいかなる様相をもって現れているかを解明することを目的としている。

本論は4章から構成される。第1章はクレズマー音楽の略史を述べた後にその研究史のレビューを行う。第2章は本論文の分析対象を設定し用語の規定を述べる。本論の対象は、現存する最も古いクレズマーの録音のうち、かつて結婚式で演奏されたジャンルに属する計十四曲とする。第3章はその対象曲の採譜に対する分析であり、旋律を「セクション」「フレーズ」「モチーフ」「モチーフ要素」と階層的にレベル分けした後に、各レベルにおける反復の現れを詳細に記述する。第4章は第3章の記述を受けて、そこに現れた反復の様相を整理し、旋律の大まかな構成をエネルギー論的なカテゴリーで説明しながら、クレズマー音楽における反復の「意味」の考察を試みる。結論として、①クレズマー音楽にはセクションからモチーフ要素に至る各レベルのすべてにおいて反復が見いだされること、②反復は旋律構成における緊張と弛緩、流れの停滞とその解消などに貢献していること、③音楽ジャンルによって反復の様式に相違がみられること、④結婚式の音楽としての機能が楽曲構造に反映している面があること、などを指摘した。

その文化史的重要性にもかかわらず研究蓄積の乏しいクレズマー音楽に対して、「反復」がこの音楽の本質であると見抜き、新しい視点として設定したことは、それ自体がユニークで重要な指摘であり評価に値する。しかし、この論文において執筆者がその着眼点を自ら深め、展開していくことには、残念ながら成功したとはいえない。第一に、結婚式のレパートリーである十四曲を分析対象としながら、それが担った文化的脈絡と音楽分析とはほとんど、もしくは恣意的にしか結びついていない。あえて脈絡を断ち切り分析に徹するのであれば、この対象設定にさほどの意味はないことになる。第二に、反復という現象を「結果」としての音のレベルでしか把握しておらず、音楽の「生成」いいかえれば音楽家の創造性に関わる問題として見ていないために、対象曲だけにしか当てはまらない、ごく表面的な記述に終始している。第三に、クレズマー音楽における和声進行を論じた執筆者自身の修士論文を含め、従来の研究蓄積を有効に活用していない。これらの問題点ゆえに、その結論がきわめて平凡なものに終わったことを遺憾とするが、上述の着眼点から一定の成果を取めたことは認められるので、合格と判定した。